

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す



平成16（2004）年4月、神田外語大学第4代学長に赤澤正人氏が就任しました。外務省出身の赤澤先生は、ドミニカ共和国の大使を務めるなど国際政治の一線で活躍されてきた方です。学長就任後、赤澤先生は積極的に学生たちと語り合いながら、若者たちが目指すべき高き理想を示していきました。今も神田外語大学で教鞭を執り続ける赤澤先生に、永年にわたる神田外語とのご縁と、世界の舞台を目指す若者に必要なこととは何かをお聞きしました。

私の母は東京で教師をしていたのですが、佐野きく枝先生と一緒に働いていた時期がありました。言わば、先輩先生でした。ですから私も幼い頃に、きく枝先生のお宅にお邪魔した記憶があるのです。上野の池之端だったと思います。大きな床の間があって、そこを走り回って母親に怒られた覚えがあります。

佐野公一先生は、怖いおじさんというイメージが残っています。きく枝先生もやはり厳しいけれど、母親的な厳しさですね。古きよき日本の良妻賢母、そして昔の先生という感じです。私の母もそういうタイプでした。ああゆう先生は、もうあまりいなくなっちゃいましたね。

私は東京で生まれ、横浜で育ちました。中学、高校と栄光学園というミッションスクールに通いました。校長先生がドイツ人でしたし、回りにも外国人がたくさんいました。そんな環境だったので、海外への憧れもありました。国際問題、国際関係に関心が湧き、それと高校生ながらに「日本はなんて外交下手なのだろう」と思っていました。自分が外交の世界に入って何かしたいと思い、外交官を目指すようになったのです。



きく枝先生はじめ佐野家の方々とは、ずっと家族ぐるみのお付き合いをさせていただきました。昭和39（1964）年に私は東京大学に入りました。あるとき、外交官を目指しているということを、公一先生にお話すると、「外国語の勉強ができる学校を神田に創ったから学びに来なさい」とおっしゃっていただきました。今の神田外語学院ですね（※1）。昼間は駒場にある大学に行き、夕方から学院の夜間クラスに通い始めました。バレーボール部にも所属していましたが、できるだけ通うようにしました。（1/10）

1. 佐野公一先生が英会話に関する事業を始めたのは昭和32（1957）年。昭和38（1963）年にセントラル米英語学院を創立し、翌昭和39（1964）年に神田外語学院に改名した。

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



「このことわざは英語で何て言うんだい？」
経営者であり、教育者だった佐野公一先生

中学や高校では大人数のクラスで英語を学んでいましたが、神田外語学院はとても少ない人数でした。人数が少ないから、すぐに指されたし、話さなくちゃいけない。ああ、本当の英語の教育というのは、こういうものなんだと思いました。学院では、当時から使える英語の教育を実践していたのです。授業についていくのは、なかなか大変でしたよ。

学院に行くと佐野公一先生にお会いします。公一先生は、教育者であり、経営者であった。その両方を兼ね備えた方だったと思います。幼い頃感じた厳しさは変わっていませんでした。頑固そうでした。頑固一徹で、何かをやり始めたら徹底的にやり遂げるという感じです。

ある時、学院でお会いすると、公一先生は辞典を広げて、日本語のことわざを英語に翻訳しようとされていました。「これは英語でなんて言うんだらうね。英語で適訳がないけれど、どう訳したらいいかね」とお聞きになりました。ご自分でも英語教育に関心を持って、そういう風に勉強をされていました。



昭和43（1968）年4月、私は外務省に入省しました。それからは海外勤務も多かったのですが、日本に帰国するといつも公一先生、きく枝先生のところにはご挨拶にお伺いしていました。もちろん、学院の事務長をされていた佐野隆治会長にもお会いしていました。経営感覚に優れた方だなという印象が強かったですね。若い頃にご苦労されて、実体験から磨かれた経営感覚です。とりわけ、公一先生が亡くなられてからは、その感覚がさらに鋭くなっていったように思います。

外務省時代、私の第一外国語は英語でしたので世界中に行きました。米国、ケニア、カナダ、ペルー、オランダ、パキスタン。ドイツのデュッセルドルフでは総領事を務め、平成10（1998）年1月に中南米のドミニカ共和国の特命全権大使を拝命いたしました。（2/10）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す



悩まずに、すんなりと学長を引き受けました
教育者としてのDNAがあるのかもしれない

平成13（2001）年3月にドミニカ共和国での任期を終えると、日本貿易振興会（ジェトロ）などの外務省関連の団体に出向しました。平成15（2003）年、理事長をされていた佐野隆治会長から電話がありました。「お手数だが、履歴書を送ってくれないか」というのです。特に理由も聞かずお送りしました。

少しすると、「ちょっと会えないか？」と神田に呼ばれました。訪ねてみると、神田外語大学の石井米雄学長（※2）もいらっしやった。すると、佐野会長は、「実は急に石井先生が学長をお辞めになることになった。次の学長をお願いできないか」と言われたんです。本当に寝耳に水でしたね。

学長のお話をいただいたとき、私はまだ58歳で、外務省は定年前でした。一度大使を務めると、たいていは63歳ぐらいで引退するまでに2、3カ国で大使を務めるのが一般的でした。

あまりに突然で驚きましたが、意外と自然に「ぜひ、やらせていただきます」とお答えしました。やはり、DNAでしょう。母も教師でしたし、私の弟も先生をしています。我が家には教育者としてのDNAがあるのかもしれない。そして、これまでの外務省の経験を若い人たちに教えていくことの喜び、重要性を感じました。悩まずに、すんなりと学長をお引き受け出来ましたね。





石井学長に神田外語大学のキャンパスを案内していただきました。広々としたキャンパスで学生が伸び伸び学んでいる印象でした。非常に自由で開放的で、どこかアメリカの大学にも通じる雰囲気です。施設も整っているなので、こういう学校で勉強できる学生というのはいらやましいなと思いましたよ。語学というのはコツコツ勉強しなければなりませんから、真面目な学生が多いなと感じました。(3/10)

2. 石井米雄[昭和4(1929)年~平成22(2010)年]平成9(1997)年から16(2004)年にかけて第3代神田外語大学学長を務めた。文部省から新設される人間文化研究機構の初代機構長への就任要請があり、平成16(2004)年3月、任期途中で学長を退任。

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す



学生との対話で感じた内向き志向
若者には時代の閉塞感を打ち破ってほしい

学長に着任した私がとにかく心がけたのは学生と直接、対話することでした。大きな大学であると、学長というのは入学式と卒業式にしか見ないし、学長が変わっても分らないこともあります。神田外語大学ぐらいの規模だと学長との距離は近くなりますが、そうは言っても3000人以上の学生がいます。

ブリティッシュヒルズで行われる新入生のオリエンテーションでは、全学科の1年生と語り合いました。学生は学科ごとに数十人ずつ来て、1泊していくのですが、私は11連泊です。オリエンテーションには必ず「学長と語ろう」というセッションを入れてもらい、夜はパブで遅くまで話しました。未成年ですから、ソフトドリンクを片手にです。

じっくり話していると、もっと話したいと言ってくれる学生が現れます。私は大学で授業を持っているわけではないので、クラスでは話す機会がありません。そこで、もっと突っ込んで話したいという学生とは、ランチを一緒に食べながら話すことにしました。人数が多いといろいろな話ができないので、毎回7、8人ぐらいのグループに分けて、「学長と語ろう」という企画を続けました。



学生たちと話していると、当然のことながら大きなジェネレーションギャップを感じました。私の学生時代は、海外に留学するなんて夢のまた夢でした。機会があったら、何としてでも行きたいと思いました。でも、学生たちと話していると、「旅行だったらよいけれど、コンビニがないと生活できないので留学はしたくない」という声も聞かれました。外国語を学ぶ神田外語大学でも、内向きの若者がいることに驚きました。

今の20代の若者達は物心ついたときにはバブルが弾けていて、身の回りにリストラにあった人がいたり、そういう話ばかり聞かされて育ってきました。だからどうしても内向きの姿勢、守りの姿勢になってしまう。ある学生は「小国・日本」という言葉を使っていました。環境問題の話をしていると、「温暖化防止に向けて、アメリカや中国といった大国は別として、小国・日本にできることはあまりないと思います」と言うんです。彼らは社会の閉塞感を強く感じているのでしょう。でも、そういう時だからこそ、この閉塞感を若者が打ち破っていかなくてはならないのです。(4/10)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す

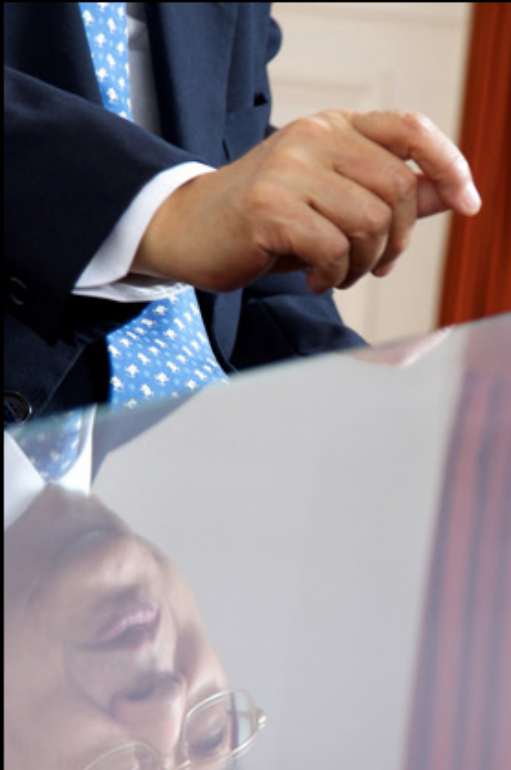


神田外語大学の学生の英語は国際会議で
議論できるぐらいのレベルであるべき

一方で、学生たちは鋭い感性を持っています。その感性に響く何かを提示していくことを心がけていきました。

例えば就職先の設定です。英語の得意な学生は就職先の御三家として、航空会社、旅行会社、国際ホテルを挙げます。それらの仕事はもちろん素晴らしいけれど、もっと広い視野を持ってほしかった。今の世の中は、英語を使わない職種、国際感覚が必要のない職業を探すほうが難しいといっても過言ではありません。ただ、学生にはそこがなかなか理解できないのです。

例えば、ランチミーティングのときも、「語学を生かすのなら警備保障会社もありますよ」とアドバイスしたことがあります。学生はぼかんとしていました。でも、大手の警備保障会社は、大使館や海外の日系企業の警備も手がけており、そういった仕事には必ず外国語が必要になるのです。そんな話をすると、すぐに動く学生がいて、総合警備保障に就職を決めました。何かヒントがあれば、彼らは積極的に動くことができるのです。



語学の学習についても、もっと高い志を持ってほしいと思いましたね。神田外語大学にはELI (English Language Institute) のような素晴らしい機関もあり、学生たちは外国人の先生方とカジュアルな英会話を楽しんでいる。でも、それが「自分は英語が話せる」と勘違いすることの原因になるときもある。神田外語大学の学生の語学のレベルはどうあるべきでしょうか？外国人と気軽に話せる程度でよいのでしょうか？その程度話せたとしても、国際会議に出席して、日本の領土問題について英語で議論できるでしょうか？私は、それぐらいの議論ができて、はじめて「英語が話せます」と言えると思っています。

そのためにはまずは議論の内容を理解することです。その話題について日本語できちんと意見が言えるようになる。その意見を表現できるレベルの高い英語を身につける。当時、神田外語大学の学生は、日常会話が話せるレベルで満足してしまう学生と、専門性を突き詰めてレベルアップしていく学生にはっきりと分かれていました。しかし、その格差はものすごく大きい。会話だけで満足している学生をどうやって高いレベルに押し上げるかが課題でした。(5/10)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す



学生たちの鋭い感性でアンテナをはれば
英語にしかない表現をキャッチできる

幸い、私には外交官としての経験がありましたから、外務省の英語とは何かを実体験として話すことができました。

外務省の文書や国際会議では格調の高い英語が求められます。入省すると英文で文書を書く訓練もします。例えば、日本の総理大臣からアメリカの大統領への書簡を作成する。まずは直属の上司が確認して、さらに課長、局長が内容をチェックしていく。最終的には英語そのものを確認する専門家がいる。書類が私の手元に帰ってくるときには、ペンで真っ赤になっています。

「富士山のまわりに雲がたなびいています」という文章があるとします。私だったら、「Mt. Fuji is surrounded by clouds.」と訳すでしょう。でも、外務省の英語の専門官は、「Mt. Fuji is enveloped in clouds.」と訳すのです。我々は「envelop」は「封筒」と教わっているからこういう使い方はできない。でも、英語には「enveloped in flames」で「炎に包まれる」という表現がある。そんな例を挙げながら、学生たちには、外務省では格調の高い文章が書けて、使えなくてはならないことを伝えていきました。



表現を豊かにするためには、新聞や雑誌、論文、小説など、とにかくたくさんの方の英語を読まなくてはなりません。ELIの先生と話するときも、先生方が使っているネイティブの表現で、自分の知らないものに敏感になる。せっかく先生がそういった表現を使っているのに、自分が敏感になっていなければ素通りしてしまいます。アンテナをはってれば、キャッチできます。若者だからその感性は鋭い。英語らしい表現、英語にしかない表現をどんどん吸収していけば、次第に自分もそういった英語を自分で使えるようになります。

学生には、語学だけでなく、社会や世界の動きにも関心を持ってもらいたかったので、外務省時代の知人にも大学の行事に参加してもらいました。平成19（2007）年の大学創立20周年事業では、国際関係で活躍している外務省出身の岡本行夫さんと田中均さんに講演していただきました。岡本さんは私の同期で、田中さんは私の一期下。戦略と行動力のある田中さんは小泉首相の北朝鮮訪問に尽力をした人物です。現実の外交がどう動いているか、生の声を聞かせることができ、学生たちにも刺激になりました。（6/10）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す



弱点を浮き彫りにした第三者機関の評価
ビジネスや通訳・翻訳などプラスαを強化する

平成16（2004）年、すべての大学は文部科学省が認証する第三者機関によって、教育研究活動や組織運営、施設設備などを評価されることが義務づけられました。佐野会長は、「とにかく最初に認定を受けよう！」と号令をかけました。おそらく全国の大学でもずいぶん早かったんじゃないかな。初めての体験でしたから準備は大変でした。とりわけ事務局は膨大な資料を準備しなければなりません。平成18（2006）年、神田外語大学は文部科学省が認める評価機関から総合的「認定」の評価を受けました。

波及効果も大きかったですね。評価を通じて、神田外語大学はどこが優れていて、どこが弱みかを自分たちで自己点検することができたのです。大学の現状を理解しながら、改善策を考えるという意味ではよい機会になったと思います。

大学としての強みは教員が非常に多様であるという点です。外国語大学でありながら、一般教育が充実しており、さまざまな分野についての授業が受けられる。一方、弱みであり課題は、内容を伴いながらどのようにして学生の語学力を高めていくかでした。その議論から生まれてきたのが、国際コミュニケーション学科の国際ビジネスキャリア専攻や英米語学科の通訳翻訳課程です。



国際ビジネスキャリア専攻は、外国語を学習しながら、言葉プラスアルファとして国際ビジネスを専攻として学ぶというものです。次元の高い英語力を身につけたい学生には、通訳翻訳課程を設けました。1年生から通訳・翻訳家になるための訓練を始める。教員はプロの通訳や翻訳家をお願いしました。



平成20（2008）年に国際問題研究所が設立されましたが、これも本学には社会科学系の研究所がないということで、学生たちが国際問題にもっと強い関心を持ってもらいたいとの思いからです。

私は平成22（2010）年に学長を退任してからも、特任教授や非常勤講師として、「国際関係論」や「国際機構論」を教えています。最近では、在外公館の派遣員に合格する学生も数多くいますし、学生たちからも「外務省を狙っているんだけどどういう勉強をすればよいでしょうか」と聞かれるようになりました。ずいぶん意識が変わってきたんだなと思います。（7/10）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す



専門の教育機関としての評価を得て
英語教育のアウトソーシングが可能に

関東から東には、外国語大学は、東京外国語大学と神田外語大学しかありません。その特殊性は多いに生かすべきでしょう。ひとつの方法として他大学との連携があります。他大学の学生は神田外語の質の高い外国語教育を享受し、神田外語の学生は本学にない科目を他大学で学ぶことができます。

千葉県内にある大学との連携もずいぶんと進みました。平成18（2006）年には、千葉大学と単位互換の協定を締結。千葉大は国立大学であり、一般教養科目の授業も充実しているし、自然科学系に興味のある学生にとっては関心のある科目がたくさんある。学生にとってはとてもよい刺激になりましたね。平成20（2008）年には、敬愛大学、城西国際大学が加わった4大学で「ユニバーサルコミュニケーションに向けた教養教育のための千葉圏域コンソーシアム」を立ち上げ、大学間での単位互換をはじめとした連携の強化が図られました。

神田外語大学の強みをどんどん世の中に提供していく。その極み就是他大学に語学教育のアウトソーシングを提供するソリューション事業でしょう。平成18（2006）年に東北大学で始まりましたが、その後、広島文教女子大学や熊本県の崇城大学に広がっていきました。外国語教育という自分たちが不得意とする分野を、神田外語のような専門の教育機関にアウトソーシングするのは、とても自然の流れだと私は思います。やはり、餅は餅屋です。



他大学の方にお聞きすると、学生に生きた英語を学ばせたいが、専門知識を持ったネイティブ教員をどう集めてくるかが分からない。見つけたとしても、望む教育ができるか保証はない。でも、神田外語で数年間教えた教員なら安心だとおっしゃる。神田外語での経歴が教員の評価そのものになっているのです。

私が一番感心したのは、各大学に赴任した外国人教員の姿勢です。神田外語大学の学生はレベルの差こそあれ、外国語に興味がある。でも、広島や熊本大学には、英語は専攻ではないし、英語など大嫌いという学生もいる。でも、ELIの教員たちは、「神田外語とはまったく違うタイプの学生に教えるにはどうしたらよいか？それを研究することが自分のチャレンジになる」とおっしゃる。神田メソッドがどんどん広がっていくのは、こういった先生方がいるからなのだと痛感しました。(8/10)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す



国際舞台では日々想定外のことが起きる
精神も、肉体も強くななくちゃいけない

佐野隆治会長は、経営者として、徹底してぶれない考え方をお持ちです。学長に就任したとき、「自分は経営をやる、学事に関しては任せる」と言っていたので、非常にやりやすかったですね。大学として教授会で決まったことを理事会に反映する。もちろん、経営的観点からの指示はありましたが、基本的にこちらの決定を否定されることはほとんどありませんでした。



7号館の計画は、新しい図書館を作ってほしいという要望に応えるかたちで始まりましたが、2階には、英語以外の言語を学ぶ学生に各言語の文化環境の施設、MULC (Multilingual Communication Center) が計画されました。平成15 (2003) 年には6号館が完成していて、英語の教育施設 SACL A (Self-Access, Communication, Learner Autonomy) ができたのですが、他の言語の施設はなかったからです。

平成20 (2008) 年に完成した7号館は、ガラス張りの流線型の建物で、MULCでは各国の建物が見事に再現されました。あそこまですごい施設を創るなど誰も予想していません。こんな立派なものが必要なのかという意見もありました。しかし佐野会長は「創るんなら、中途半端なものは創るな」とおっしゃいます。ブリティッシュヒルズと同じです。費用がかかってもそれは投資であり、必ず評価されるという考えです。そしてキャンパスを訪れた高校生は、SACL AやMULCを体験すると「絶対、神田外語大学に行きたい！」となるのです。



外国に憧れて神田外語大学に入ってきた学生たちには強靱性を持ってほしい。英語で言う“resilience”です。バネで跳ね返す力。学生たちは「国際舞台で働きたい」と言います。でも、それは日々想定外のことが起こることを意味します。今まで日本では想定外のことはあまり起きずに、たいていのことは見通せてきた。ところが、東日本大震災と原発事故という想定外のことが起きました。

外国で仕事をしていると文化の違いもあり、想定外のことがばかりです。外交官としての仕事でも、想定外のときはどう対応すればよいか、どう心構えをすればいいかが重要でした。いちいち潰れていけない。立ち向かっていくには、精神的にも、肉体的にも強くなっちゃいけないのです。異文化での想定外に耐えた経験は、日本で働いていても必ず役立ちます。(9/10)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第18回 赤澤正人 神田外語大学第4代学長
国際舞台を目指す学生に道を示す



「あいつが言ったことなら信頼しよう」
国と国の関係も結局は人と人なんです

デュッセルドルフで総領事をしていたとき、ドイツ人で日本のお地蔵さんに興味のある方がいました。日本中のお地蔵さんを見て回っているという。お話を聞くと、自然と相手への興味が湧き、会話が生まれます。何かひとつのことに秀でると相手の関心を引きつけることができる。人を引きつける。そこで人間関係が出来ていく。専門分野も、外国語も、外交も関係ない。自分が熱中でき、相手を引きつけられる何かを持っていることが重要です。深く深く何かを突きつめていくことは、人間としての魅力につながっていくことだと思います。

外交は国と国の関係ですが、結局は人と人の関係なんです。どんな外交問題も人と人の信頼関係に基づいて、物事が動いていきます。「あいつが言ったことなら信頼しよう」ということです。深い信頼関係を得るには人間的な魅力が必要です。外交分野だけでなく、国際ビジネスの現場も同じでしょう。生まれ育った背景も文化も違う、どこの馬の骨とも分からない者同士が交渉を通じて接触するわけですから、人間としての幅の広さと魅力が必要なのです。

最近ではメールでのコミュニケーションが増えて、返信がないと不安になるようです。でも、社会に出れば、独りでやらずにちゃいけないことばかりです。表面だけの友人が本当に必要でしょうか？友人であれば深い話ができなければ意味がありません。表面的な人間関係に惑わされるなら、独りでいたほうがいい。独りでできることはたくさんあります。



神田外語の学生には、外国に飛び出して、海外から見て日本のよい所をたくさん知り、何よりも異文化の中で外国人と渡り合う強靱さを養ってほしいですね。(10/10)

赤澤正人（あかざわまさと）

昭和20（1945）生まれ。昭和43（1968）年3月、東京大学法学部卒業後、外務省に入省。昭和46（1971）年6月、米国・ハバフォード大学国際関係学科を卒業。以来、各国の大使館勤務を経て、ドイツ・デュッセルドルフ総領事、ドミニカ共和国大使を歴任する。平成16（2004）年に神田外語大学の第4代学長に就任。6年間の任期を務め、平成22（2010）年3月に退任。平成24（2012）年4月、嘉悦大学学長に就任。現在も非常勤講師として神田外語大学で教鞭を執り、外交官として得た知見を学生たちに教授している。

令和6年（2024）年3月永眠。享年78歳。